

武蔵野市第六期長期計画・調整計画策定委員会（第12回）

■日時 令和5年4月21日（金） 午後7時～午後9時21分

■場所 市役所802会議室

出席委員：渡邊委員長、岡部副委員長、木下委員、久留委員、古賀委員、鈴木委員、
中村委員、箕輪委員、吉田委員、伊藤委員、恩田委員

欠席委員：なし

1. 開 会

委員長が開会を宣言し、企画調整課長が委員の出席状況及び本日の議事内容と配布資料について説明した。

2. 議 事

（1）教育委員との意見交換

委員長の挨拶と自己紹介に続き、策定委員が自己紹介した。

続いて、教育長及び教育委員が自己紹介して、意見交換を開始した。

【A教育委員】 討議要綱の15ページ「5 第六期長期計画（令和2（2020）年度～）の実績」の「2）子ども・教育」で、市民科の取組みについて触れていただきたい。これは令和2年度から行っている武蔵野市の教育の特徴的な取組みであり、今その実践を積み重ねている。

子ども・教育分野の基本施策4の3）「全ての学びの基盤となる資質・能力の育成」は主に学校図書館と学習者用のコンピュータについて書かれている。「全ての学びの基盤となる資質・能力」には、情報活用能力だけでなく、知識・理解、思考力、判断力、言語能力、コミュニケーション能力、学びに向かう姿勢、人間関係構築能力も含まれる。市内の学校公開で授業の様子を見ると、学習者用コンピュータの活用は、3年前に比べて各学校でかなり進んでいる。教員同士でも情報交換して、期待したとおりに授業で活用できている。ただ、これからの一層の進化・発展にはスキルアップが大切だ。子どもたちが思考力・判断力を働かせながら、仲間とともにいろいろな価値観を共有し、みんなでよりいいものを目指すためのプレゼン能力や合意形成を図るコミュニケーション力をつけさせたい。

また、公教育なので、できるだけ全部の小学校・中学校で積極的に取り組むようにしたい。情報活用能力以外の、課題となっている力についても明記していただけるとありがたい。

基本施策5の5)「持続可能な部活動のあり方の検討」について。中学校の現場の先生は、日本型の部活動のよさを知っているが、取り組むことに負担感がある方も少なくない。教員と生徒、先輩と後輩の人間関係は部活動を通して学び、それが生きる力の醸成となる。部活動は生きる力の勉強そのもので、教員が関わることに価値がある。「拙速な地域移行を行わず、部活動指導員の充実、体育協会との連携をはじめとした地域人材の確保」を、様子を見ながら進めるというのはとてもいいと思う。教員と部活動指導員のハイブリッド型の運営ができれば、今まで全部教員が担っていたところを部活動指導員が関わって、教員の負担を減らせられるのではないかな。

【A委員】 「全ての学びの基盤となる資質・能力の育成」は、おっしゃるとおりで、情報活用能力は必要だが、情報を使うためには何が必要かという視点が大事だ。六長にも書いてはあるが、少し弱い。資質・能力を全体的にどう育てていくかをどのように書き込めるか、検討する。

教員と部活動指導員のハイブリッド化については、負担感を減らすことだけでなく、地域の大人が子どもたちの成長にどのように関わるかという視点が大事になる。「拙速な地域移行を行わず」とあわせて、連携のあり方も書き込みたい。

【委員長】 現場の問題として、学習指導要領が改定され、地域との連携や、コンピュータをはじめとした新しいことも一層求められる中で、部活動は現在の形態あるいはハイブリッドで維持することは可能か。統計データ等を見ても教員の負担感はかなり大きい。日本は海外に比べて、授業の準備に使う時間よりも課外活動に使う時間のほうが圧倒的に多い。そういう状況にあって、部活動をどこまで維持するべきなのか。小中学校の教員の本分とは何かも踏まえて、率直なところを伺いたい。

【A教育委員】 部活動にどういう形で参加するかは、先生によっても大分違う。その価値はわかりつつも、授業準備のほうに時間を使いたいという先生も多い。

生徒数の減少で、今までの部活動が維持できない、希望の部活動ができないということが、今各学校で非常に問題になっている。担当の先生の異動で部活動が存続できなくなったという例もある。地域移行はまだ早いと思うが、地域の指導者との分担も含めて、部活動のあり方を考えていただきたい。

【委員長】 私はそもそも人数を増やすべきだと思うが、国の政策上、できていない。限

界が来ている現場をどう考えるか、皆さんと一緒に知恵を出していきたい。

【B教育委員】 基本施策4の3)「全ての学びの基盤となる資質・能力の育成」の学習者用コンピュータの活用については、これまで蓄積した内容を生かして、先生方と児童生徒、保護者の三者が同じ方向とレベル感で推進し続けていただきたい。

基本施策4の4)「多様性を生かし、市民性を育む教育」について。公立の学校では、一つ一つの教科に興味を感じ、それを楽しむという導入が大事だ。一方、私たち親の世代は、自分のいいところを自分で言うのは恥ずかしいことだと育った。自己肯定感とか自尊感情を子どもたちに伝える場面では、私たち自身ももう一回考えなければいけない。

基本施策4の6)「不登校対策の推進と教育相談の充実」子どもたちの居場所については、公的なものもそうだし、地域の方々の有志によるボランティア的な動きに合流して、いろいろな切り口からサポートしていけばいいのではないかな。

基本施策5の3)「学校と地域との協働体制の充実」について。PTAは任意団体なので加入者が減り、役員の担い手不足に悩んでいる。モデル校が始まるにあたり、この課題にも取り組んでももらえたらうれしい。

基本施策5の4)「学校改築の着実な推進と安全・安心かつ適切な施設環境の確保」について。私は消防団に入っていることもあり、学校は災害時に市民の避難所ともなり得るため、日ごろから愛着の持てる施設であるようにと思っている。

基本施策5の5)「持続可能な部活動のあり方の検討」について。中学校の生徒に、学校の中で何が楽しいかというアンケートをとると、「部活動」がかなり上位に来る。生徒の数が減っても部活の種類はこれ以上減らさず、隣同士の学校と合同で行うなど様々な工夫をして、生徒たちが入りたいと思う部活の選択肢を維持することが、子どもたちにとっていいのではないかな。

平和・文化・市民生活分野の基本施策6の1)「生涯学習施策の推進」について。大人になっても、新しい情報を知りたいし、学びたいし、研究したい。知的好奇心がかき立てられること自体が学びになる。この部分はぜひ推進してほしい。

図書館はデジタル化が進んでいるが、紙の本の大切さというものもある。親が子どもを寝かしつけるときに本を読んであげる、あるいは小学校でも紙芝居などをすると、子どもたちはとても喜ぶ。本は、紙とデジタル化されたものの使い分けも大切だ。

ふるさと歴史館は、私も何度か行ったことがあるが武蔵境駅からのアクセスが課題だ。

平和・文化・市民生活分野の基本施策6の2)「市民の誰もがスポーツを楽しめる環境の整備」について。健康の維持や増進のためにも、走ることも含めた色々なスポーツができる機会を持てるようにしてほしい。また、総合体育館へのアクセスも課題だ。吉祥寺や境から、子どもを自転車に乗せて通うには行きづらく、電車とバスだと乗り継がなければいけない。

【A委員】 先生と児童生徒、保護者で、コンピュータに関する理解のレベル感を同じにすることはとても大事だが、どのようなイメージをお持ちか。

【B教育委員】 今、学習者用コンピュータが一人1台、子どもたちに渡っているので、先生、保護者、児童生徒の三者で、同じ方向を向いて、同じレベル感で使っていくという意味だ。

【A委員】 学校から帰った後、ご家庭で子どもたちが好奇心から調べる、あるいは情報収集するというレベル感を同じにするのは難しい。保護者からも意見をいただき、学校としてどう考えるかという視点が必要ではないか。

多様性に関心を持つことや自己肯定感、自尊感情についてどのように積み重ねをつくるか。そうしたことを計画に入れるのは難しいが、子どもたちがどう感じているかの実態把握などの調査を行う必要がある。

不登校対策の有志ボランティアをはじめとして様々な方が関わる部分については、これまで市民から、不登校のお子さんに対してはいろいろな方が関わっていることやいろいろな場があることが大事だというご意見をいただいている。不登校対策として何ができるかはもう少し考える必要がある。

P T Aや災害時のこと、部活動等全部につながるが、今、誰もがみんな忙しく、自分の子どものつながりではないところに参加することが難しい時代である。子ども・教育分野だけでなく、ほかの部分も絡めて市民全体でどう考えていけるかという視点を入れていきたい。

【委員長】 市民との意見交換会でも、生涯学習あるいは社会教育をもっと広げてほしいというご意見をいただいている。生涯学習は多様だ。いついかなるときも、どんな属性を持った人も、何歳でも学び続け、成長することを可能にする仕組みは重要である。

図書館は、電子化が始まり、試行錯誤の段階である。リアルな本の再認識をすることの重要性なども、長計で扱うことなのかはまだわからない段階だが、図書館あるいは書籍等の機能として考えていきたい。

ふるさと歴史館のアクセス問題は、解決が難しい。バスを出すなどは不可能ではないかもしれないが、それよりも、歴史館に行って何かについて知りたいと思えるような魅力あるところにしていくことのほうが重要だ。そこにアクセスすることがどんなプラスアルファになるかを一緒に考えていくのがよい。

市民スポーツは、競技志向の方も、健康志向の方も、多様な領域に関わり、様々な方が参加できるよう、できる限りバリアフリーを進め、スポーツの種目等を増やすなど、ノウハウを蓄積し、市民スポーツ振興の重要性を考えたい。

【副委員長】 学びには、思考力、判断力、コミュニケーション力、プレゼン能力が大事である。そのためにICTも活用する。英語も、大事なものは単語とか文法ではなく、コミュニケーション能力とかプレゼン能力だ。しかし、日本の教育を見ていると、例えばICT活用や英語教育の肝となるすばらしいところを教員が教えられず、英単語のテストや、パソコンの技術的な使い方とか定義を書けというようなことにとどまっている。教員は、子どもたちのためという視点に立ち、スキルアップ、リスキリングして、思考力、判断力、コミュニケーション能力、プレゼン能力を高めてほしい。忙しい先生方がリスキリングするのは大変かもしれないが、教育委員会には、ネットのすばらしさとか活用の方法、自分たちの能力を上げることを教えられる先生の育成をお願いしたい。

【C教育委員】 私は、基本施策4の1)「幼児教育と小学校教育の円滑な接続」と、基本施策4の3)「全ての学びの基盤となる資質・能力の育成」について意見を述べさせていただきます。

将棋の教室に来る子どもたちは、メインが幼稚園年長で、小学校の5～6年生ぐらいまでだが、みんな教えることが好きだ。私が「この子との将棋でいいところとよくなかったところを教えてあげて」と言うと、子どもたちの目は輝く。今の子どもたちは与えられることばかりで、自分が本来持っている「人に必要とされたい」とか「人を助けたい」という気持ちがあまり醸成されていない。中学生は、園児や小学生を見て、「自分もこういう時期があったな」と思うし、園児たちは「こんなお兄ちゃんになりたいな」と思う。そういう心の交流がこれからはとても大切になる。

同時に、これからの社会を生きていく子どもたちにとっては、デジタル・シティズンシップは切り離せない。学校を訪問したとき、動画を編集している子どもがいて、無料の動画編集ソフトを調べて使っていると話していた。デジタルな部分の自由度を高くして、新

たな才能を発掘する一方で、本来の人間のコミュニケーションやつながりを大切にする必要がある。コミュニケーション能力を育めるのは、武蔵野市のいいところであり地域性であるということを施策の中に盛り込んでいただけたらうれしい。

【A委員】 確かに、子どもたちは教えることが大好きである。「何やっているの？」と子どもたちに聞くと、うれしそうに教えてくれる。また、幼稚園や保育園の子どもと小学生の交流でも、小学生たちが園児を喜ばせてあげたいという気持ちでいろいろ準備する。実際は思っていたのと違うことがいっぱい起きるが、それでも何かの役には立っているし喜んでもらえてうれしく思い、自信につながることもあれば、反省し次に繋げることもある。小学生と幼稚園・保育園の子どもたちの交流は、負担を伴うことではあるが、子どもたちに任せることで、子どもたちが自分たちで授業を進めてくれるようになるなど、子どもたちに教えなければという気負いが和らいだとおっしゃる先生もいる。交流だけでなく接続という考え方で経験や学びをつなぐことが武蔵野市でもっと進んでいくといいと思う。

【委員長】 ITの変化は速く、子どもたちは勝手についていく。デジタル・シティズンシップを涵養するためには、親や教師がデジタルに関するリテラシーを持つ必要がある。コミュニケーションの形は変わるかもしれないが、コミュニケーションの重要性は絶対に変わらない。

【D教育委員】 討議要綱を拝読した。個々の内容はすばらしく、非常に時間をかけて議論された結果だと思った。

1 ページの「1 武蔵野市における長期計画・調整計画について」の「(1) これまでのあゆみ」のキーワードは「武蔵野市方式」と「市民自治」だ。ここでは「市民参加・議員参加・職員参加」、そして「市民自治の考え方は、本市の市政運営の最も重要な原理」と、高邁な理念が高らかに語られる。これが、私が武蔵野市民になりたいと思った理由でもある。この高邁な理念は、計画の中でもっと目につくところに落とし込んでほしい。

市民自治の重要な原理を成立させるための1点目として、子どもに対しては武蔵野市民科があるが、大人が武蔵野市方式を学ぶ場はどこで保障しているのか。生涯学習や社会教育の文脈でストーリーをつくってほしい。武蔵野市の生涯学習の調査を見ると、学習したいことがあって学習する人は3割以下だった。生涯学習は、学習という名前のとおり、個人が自発的に行うものだが、市民自治を学習するためには何らかの環境整備が必要だ。大きな理念である武蔵野市方式を計画のあらゆるところにちりばめて、市民の方がパッと見

てわかることが重要だ。

2点目は、学校図書館について。基本施策4の3)「全ての学びの基盤となる資質・能力の育成」に「ラーニングコモンズとしての学校図書館のあり方についての検討や学校図書館サポーターの機能の拡充を進める」とある。ラーニングコモンズは、ファシリテーターという、教員の立場とも全く違った概念を意味する。ここではこの言葉で十分かもしれないが、早い段階で具体化すべきところであり、内容をしっかり検討する必要がある。特に、文科省が学校図書館のガイドラインを提示しているが、ほとんどの自治体では、そのガイドラインに沿った形での充実が図られていない。ラーニングコモンズを学校教育の場面で行うイノベーティブな学習環境を提供する自治体として、ソフトの面も先駆けて計画案のどこかに頭出ししてもらいたい。

最後に、武蔵野市の未来志向の教育について、言葉をもっと盛り込んでもらいたい。教育はよく工場に例えられる。工場のように目的に沿って合理的に行われる環境は、子どもにとってはつまらないだけだし、かわいそうなことなのだと、かつては言われていた。今は、子どものエモーショナルな面を重視することが学習の成果に結びつき、Well-beingを実現するマージン（余白）、自由のある教育がいいという話をよく耳にする。この計画策定の教育の場面にも、子どもも大人も楽しい、ワクワクする、自由がある、選択肢があるということが見える表現があると、魅力的になる。武蔵野市はセカンドスクールなど社会に開かれた教育課程を先駆的に進めてきたすごい自治体であり、自由のある教育をすることをもっと前面に出していいのではないかな。

先ほどC教育委員から、教えることを子どもが楽しんでいるという話があったが、選択の自由があることは、子どもに豊かな時間を創出させる。武蔵野市の豊かで文化的な資源や教育資源をもっとワクワク感を持って見られるような計画にしてもらいたい。

【委員長】 1点目の、「武蔵野市方式」、「市民自治」のストーリーをどのようにつくっていくかについて。討議要綱に関する各種市民意見交換会を開催し、市議会議員と議論を重ね、パブコメを募ることが、市民自治の計画策定だ。ただ、それが見えるストーリーになっていない。この計画策定に限ることではないが、市民が学び、市政に関わることで自治に及ぶ好循環のようなものを生み出すという本来の理念を魅力あるストーリーとして市民にどう見せるのかは、まだまだ課題があると今改めて感じた。我々の宿題としたい。

【A委員】 今後の学校図書館のあり方や未来志向の言葉の導入について貴重なご意見を

いただいた。小学生も幼児も、知ることが楽しくてしょうがなく、意欲にあふれている。これまでの学校教育を前提として書いている部分と、先生たちの思考をどう転換するか、部活や研修、先生の負担感とのバランスをどうとるか、個人の学び、誰かと一緒に学ぶことが楽しいということ、人に自分の思いや意見、考えを伝えること等、学習の楽しさをどう包括的に考え、計画に記載するか、考えたい。

【B委員】 私は、放課後という言葉が気になっている。放課後という言葉は、小学校、中学校、高校では使われるが、幼稚園を含めほかでは使わない。放課後という言葉で引くと、「学校の正規の活動が終わった後の時間」と書いてある。学校は、ある意味で規律やルールに縛られて過ごす空間である。そこから解き放たれる時間と場所が放課後だと解釈すると、子どもたちは放課後に生き生きするはずではないかと思う。

私は、家庭と学校との間がないことが問題だと思っている。その「間」となるものが地域であるべきで、子どもたちが生き生きと暮らせる空間や時間を地域につくる。私は「女性目線」という言い方はあまり好きではないが、女性は地域をご存じだ。男性は、私も含めてどうしても組織の規律に安住してしまう。私と家内もそうだが、家内は地域で生活していて、私は自宅と職場の行き来のみで、地域のことをほとんど知らなかった。長計の策定委員として携わせていただく中で、地域というものを再確認したところである。今、両親が働きに行って学校が始まるまでの朝の時間帯の子どもの居場所がないことが問題になっている。先ほどから出ている「先生」、「児童」、「保護者」というキーワードに、さらに「地域」というキーワードが出てこないといけない。開かれた学校づくり協議会という取組みがあるし、実績も出ているが、子どもたちが家と学校と塾しか知らないというのではなく、地域で自由に伸び伸びと暮らせて、子どもたちの関心に基づいて、学びや遊びができる環境づくりを進めるべきである。

【教育長】 令和5年4月に子どもの権利条例ができた。教育委員会も、子ども家庭部と一緒に子ども居場所づくりに取り組む。学校図書館も、中学校では放課後に勉強する場所や居場所として使われている。

【B委員】 子どもの居場所は、子どもをいさせる場所ではなくて、子どもがいたいと思う場所にするべきだ。

【委員長】 横浜市では、学校の空き教室をいつでも子どもがいていい場所として活用し、その管理は地域の人が担っていた。学校は、あれをしてはいけない、これをしてはいけない

いと言いがちだが、その空き教室は地域の人が管理することで、学校的なものが削減されていた。子どもが安心できる場所は、必ずしも先生の目が行き届く場所とは限らない。むしろ先生の目の届くところは居心地がよくない場所になることもある。子どもの権利条約等を使って、子どもの声を聞きながら、子どもにとっての居心地のよい場所をどう一緒につくることができるのか考えたい。そのとき、親や教員はどうしても安全・安心ばかり考えてしまうが、そうでない空間について勇気を持って考えたい。

【副委員長】 囲碁将棋部は、小学校や中学校に存続しているのか。

今はA Iが劇的に進歩している。将棋も囲碁も、リアルでなくても対戦できる。そういう昨今の変化は、子どもに対する教育にどのようなよい影響または悪影響を与えているか。

【C教育委員】 中学校の部活動の囲碁将棋部の人数は減っているように思う。

A Iは発達が非常に速く、それこそ平安時代から江戸時代を経て続く将棋も、ここ 10 年でがらりと変わった。プロ棋士もコンピュータなしでは語れない。自分の将棋を指したら、家に帰って解析し、コンピュータの答えを聞く時代だ。A Iとかデジタルなものが入ってくるのはもう止められなくなっている。

一方で、教室に来て、盤を挟んで将棋を指すと、「やっぱりいいよね」となる。そこには感情がある。コンピュータと対戦して負けても、子どもたちは涙を流さないが、将棋を指して負けて悔しい思いをした子は 30 分泣き続ける。私自身も、小学生のときに、あと 1 回で昇級するいうところで負けて、電車に乗って家まで帰ったが、すぐに家のトイレに入って大泣きしたことはいまだに覚えている。何かを通して心を育てるというのはA Iやコンピュータでできることではない。

【副委員長】 昨今のI C Tの進化が健全な教育を阻害する側面も持つ。その場合は、指導者が使い方を教育する必要がある。

【C教育委員】 共存になると思う。どちらもすぐれた面がある。それをどのようにうまくミックスし、いいところ取りをしていくかだ。

【副委員長】 私はなぜ毎年ジャンボリーで、不便でリスクーなことをしているのかと思っていたが、リアルさがいいというところもあることがわかった。

【C委員】 武蔵野市の独自の歴史、文化、自然資源、芸術作品の整理や保全・活用という視点で総合的に何かするべきではないか。武蔵野市にはふるさと歴史館があるが、古く

から住んでいる人の情報や資源が小さく分散している。市民との意見交換会では、一部の文化財が棄損しかけているという情報があった。そういうものの総合的な調査やクリエイティブな事業が教育委員会主導でできるといい。予算を取って、武蔵野市のシビックプライドにつながるような、固有の資源を一堂に見せる事業を起こせないものか。

【教育長】 武蔵野市にとっての大事な資源である考古の資料は、御殿山あたりにまとまっている。また、武蔵野市は日本で2番目に古い土器をふるさと歴史館で所管している。ふるさと歴史館は、歴史公文書館としての性質があり、担当の学芸員が展示の企画を出し合っている。小さな施設であるため複合的な見せ方ができる。中島飛行機といった比較的新しいところももう少し広く捉えることを心がけ、シビックプライドにつなげて伝える、あるいは発展させることも必要だと改めて思った。

【C委員】 市民には有識者や文化人が多く、複数の大学もある。長期計画には書いていないが、中高生が興味を持ち、調べるときに、学芸員に集中するのではなく、市民が入った事業のようなものがあるといい。

【D委員】 開かれた学校づくり協議会と武蔵野市民科は共通事項が多い。別々にではなくて統合して、スピード感を持って促進できないか。

コンピュータを使った教育の場は、学校によって、格差があるというお話だった。武蔵野市の教育活動・取組みの成果を第三者的に評価する仕組みについて、教育委員会はどう考えておられるか。

【A教育委員】 学習者用コンピュータは、どの教室でも使うようになり、子どもたちも非常にスキルアップしている。ただ、先生たちの指導力にはまだまだ差がある。全体的な底上げは大切だ。一方で、子どもたちの楽しく豊かな学びをプロデュースする力量も大切であるため、教育委員会にて先生たちのレベルをどのように上げていくか考えていかなくてはいけない。

学校ごとの評価は、今まで各学校が独自の項目で行っていた。各学校共通のもの、地域や保護者に聞いたほうがいいもの、開かれた学校づくり協議会の評価もあり、評価と目標の関連性が弱い。もう一度整理して、各学校の評価が次の教育計画に生きる形にしていかななくてはならない。

【委員長】 第三者評価は行っていないのか。

【A教育委員】 開かれた学校づくり協議会も第三者とは言いがたいところがある。いわ

ゆる評価委員会をつくっているわけではない。

【副委員長】 開かれた学校づくり協議会は、半ば内輪的なところがあるが、毎回協議会委員のコメントや評価を求められるので、私は結構厳しい意見を出している。

【委員長】 協議会による評価として地域の目は入っているが、専門家や外部組織が評価しているわけではないということか。

【副委員長】 共通の指針はない。

【A委員】 今、本当にたくさんのことが教育の中で求められており、課題として出ている部分も多い。市として現場の先生たちを支援することが子どもたちにつながると考えたとき、どういったことが核として必要か。特に支援が欲しいという部分を教えてほしい。

【A教育委員】 校長会では、教育委員会と校長でいろいろなすり合わせを行い、各学校への依頼やフィードバックをしている。教育委員会の目標や目指すことを学校の先生たちに伝え、それに取り組んだことが成果としてどう上がってきたかという、評価までのプロセスが少し弱いと感じている。例えば、学びの基盤となる資質・能力を高めるために、先生たちのどんなところを伸ばすのか、そのために何をしたらいいのかを年度初めに目標として掲げたら、その経過もきちんと見て、最後に評価するというプロセスを徹底することを今後の宿題として考えたい。

【E委員】 公立中学校の魅力を上げることを考えているか。私の子どもが通う保育園では、1クラス 20 人のうち1人が私立の小学校に行った。ある小学校は8割が中学受験をして、5割が私立中学校に行く。約半分が地域から出ていく中、地域の力をより強めるには、公立中学校の魅力を上げたほうがいいのではと思っている。

【A教育委員】 公立中学校は6校あるが、それぞれの中学校で特色のある教育活動を進めている。ただ、その内容を小学校に行って話をするとか、小学校の保護者の方に話をするというところが全く足りていない。逆に、地域の方々が中学校に何を期待しているか、どんな中学校になってほしいか等をリサーチし、地域と学校が双方向で連携できるような取組みを行うことも大事だ。

私もある小学校の卒業式に行って、私立中学への進学率を聞いて大変びっくりした。教育委員会や中学校の校長もなんとかしたいという同じ思いを持っている。いただいたご意見について中学校の校長にも伝え、具体的に取り組んでいかなければ成果は出ないと考え

るため、ぜひ考えていきたい。

【教育長】 部活動に対する生徒たちの期待は大きい。学校管理下から外すかどうかはともかく、持続可能な形で組み立てる必要がある。

また、中学校には、STEAM 教育や社会に開かれた教育課程ということにも関係して、武蔵野市民科を教科横断的にやってほしいと言っている。それがどのように機能するのが課題だ。難しいところだが、価値を生み出し、新しい魅力につなげていきたい。ある中学校では、ポスターセッションを通して、とてもいい探求的な学びにつなげていた。そういったところがこれからもっと開かれていくといいと思っている。

【教育長】 討議要綱で一点、六長の書き方との関係で、気になっているところがある。

第六期長期計画の 69 ページ、基本施策 4 の 5)「一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導・支援の充実」の 3 行目で、インクルーシブ教育システムについて「連続性のある多様な学びの場を用意する」と書かれている。インクルーシブ教育は、共生社会の実現とインクルーシブ教育システム、現在学校で行われている特別支援学級、特別支援教室、通常学級がつながっている。それを支える大事な考え方として「連続性のある多様な学びの場」と記載し、これをもとに交流及び共同学習も行っているが、討議要綱では、インクルーシブ教育システムの用語解説や本文中にはそのキーワードが見えない。六長調にも「連続性のある多様な学びの場」というワードを出してほしい。

【A 委員】 市民の方からも、インクルーシブ教育とインクルーシブ教育システムについて文言を整理したほうがいいというご意見をいただいている。書き方を検討する。

【委員長】 大変お忙しい中、長い時間にわたり様々な意見交換をしていただいたことに感謝申し上げる。いただいた意見の内容は持ち帰り、第六期長期計画・調整計画の策定に向けて、様々な形で反映し、委員会で検討する。引き続き見守り、いつでもご意見をお寄せいただきたい。

午後 8 時 26 分、意見交換を終了し、教育長及び教育委員が退室した。

(2) 討議要綱に対する市民意見等について

企画調整課長が、資料 3-1「討議要綱に関する市民意見交換会等の実施結果」及び資

料3-2「第六期長期計画・調整計画討議要綱 各種意見集約表（圏域別・オンライン・関係団体・市議会・パブリックコメント・市職員）」について説明した。

【委員長】 資料3-1の概要のとおり、非常に多くの方々からご意見等をいただいた。意見交換会への参加は第六期長期計画のときよりも多かったのではないかと。オンライン等の新しい試みも積極的に行った。各種意見交換会やパブリックコメント等を踏まえて各委員が気になった点、特に今後、第六期長期計画・調整計画案の策定に向けて議論したい部分について、担当分野に限らずご意見を賜りたい。

【B委員】 健康・福祉分野で、障害の記述が弱いというご指摘を受けたことは、受けとめなければいけない。ただ、障害はにくりにできないので、書き方が非常に難しい。少なくとも障害者・障害児等に対する記述は考慮する。そのほかについては、意見集約を踏まえ、整理する。

【A委員】 子ども・教育分野は、子どもの権利条例ができた。今のところ「制定を目指している」となっているので、内容を検討したい。

子どもの居場所、不登校のお子さんたちの学びや居場所をどう保障していくかという観点についても検討したい。

学校改築で、市長から統合の話も出ていたことについて検討したい。

子ども・教育分野から全体につながるところにどう横串を刺していくか、そのイメージをどう表現していけるかが課題だ。

【F委員】 平和・文化・市民生活分野は非常に幅広いが、プールのところはもう少し議論をするべきだ。

災害への備えについての意見も多かった。出された意見を踏まえ、書き方等でつけ加えなければいけないことを検討したい。

生涯学習に関しても多くの意見が出ている。

市民参加のソフトの面と、文化財的なところのソフトとハードの両側面も検討したい。

コミュニティの再生、市民参加をいかに促していくかというご意見も、少数ではあったが、かなり強く出ていた。難しい問題ではあるが、中長期的に見た仕掛けなり方法を再検

討できないか。

【副委員長】 ICTを進めろ、ペーパーレスにしろと言いながら、願いがある。次回は緑・環境分野に絡む部分をA3用紙に出力して机の上に置いてほしい。ほとんど頭に入っているつもりだったが、パブリックコメントに意外に意見があることに気がついた。大事なところにアンダーラインを入れて事務局に戻すので、反映すべきかどうかは事務局サイドで判断していただきたい。

【C委員】 都市基盤分野の部分を読んで、私の意見は全部事務局に送った。

都市基盤分野は、ベースとなる知識が必要で、市民にはハードルが高いからか、件数としてはそんなになかった。自分の身近な問題として捉えにくい部分があって、一人が言ってもしょうがないという背景があると思われる。ただ、先ほど土器の出土が多いとの話があったが、縄文海進とか弥生時代にアンケートをとったら、ここはやはり一番住みやすいまちナンバーワンになるのではないかな。それだけ立地的にすぐれている。都市基盤の問題は、そういう歴史を踏まえて、長い目で考える必要がある。時間を要するもの、以前から積み残されていた宿題も多い。また、都市基盤オリエンテッドの問題はなくて、健康・福祉、子ども・教育の問題が都市基盤を整備することになる。いろいろ調整したい。

【I委員】 行財政分野では、課題として3点認識している。

1点目は、人口の将来推計だ。ここには非常に懐疑的な意見のみが上がった。推計とはこういうものだとご理解いただけていない、もしくは疑問を感じられていることは事実なので、これをどうクリアに証明していくのかが課題だ。証明が無理だとしても、どう対応していくのかを考えないといけない。

財政シミュレーションは、施策設計の基本だ。人口推計は一定の条件になったら見直しをするが、財政シミュレーション等にも見直しルールを構築する必要があると考える。事務局の皆さんの業務負担を勘案し、相談しながら考えたい。

2点目として、今回調整計画は、職員の考えやデジタルの推進等、かなり新しいことを意欲的に書き込んでいる。頂戴したご意見は手法をどうするのかといった話で、基本的な推進の方向はコンセンサスがあったことが大きな収穫だった。引き続き検討したい。

3点目として、今回、市民自治の考え方もしくは市民自治そのものは重要だが、今その

実行性はあるのかという非常に根本的な疑問が出た。その象徴的なものが、住民投票条例だ。これは自治基本条例までさかのぼる。六長調においては、ここは「考えていく」としか書けないのではないかとも思う。一方で、六長調もしくは七長なり武蔵野市の自治を考えると、市民自治をどうブラッシュアップしていくのか。時代のニーズに合わせてどう変化させていくのかという大きな命題に関して、どう調整しトライしていくか、長計に書く書かないは別として、議論したほうがいい。

【B委員】 令和6年4月は診療報酬と介護報酬と障害の同時改定がある。それに向けて各事業計画の策定委員会が動き出す。今年1年は、その状況も注視し、調整しなければいけない。

【委員長】 健康・福祉分野に限らない。農業、産業振興等、同時並行で計画策定や見直し、動きがある。

【E委員】 今回、初めて市民意見交換会に参加して、いろいろな方に参加していただけただけでなく、皆さん途中で離席もせず、自分の発言の後もずっと残って聞いていらっしゃるのがすごいと思った。

参加されている方は困難に遭った人が多い。困難とは、介護、ご高齢、自転車、不登校、福祉、居場所について等だ。居場所に関連して、図書館やコミセンの機能をどうしていくかという議論もあった。

屋外プールの件は、私も一回話を振ってみたが、全く反応がなかった。こちらで思っているところと、市民の関心や思いが少し違うと感じた。

また、情報発信として市民の方にどのように届けていくかという点は、いろいろところで話題に出ていた。福祉・介護等の専門人材を地域で雇ったほうがいいという意見がある一方で、雇いにくいとの意見もあり、専門人材の話をどうするか検討する必要がある。

議論すべき点としては、行政・市民サービス・学校・学習のDXをどう推進していくかを挙げたい。

【D委員】 健康・福祉分野で、保健センターと高齢者総合センター、障害福祉センターの3つが個別の施設として建てかえとなっているが、厚労省からはデジタルヘルス改革を目指した考え方が示されている。ほかの市町村では、生まれてから亡くなるまでを一連の

つながりとしてまとめて見て対応しているところもある。それぞれの施設が老朽化したから建てかえるというのはわかるが、デジタルヘルス情報が一元化されるというときに、3つの施設を一体化することも含めて、今後市としてどのように持っていくのかというビジョン、横串となるものを考えないといけない。

三鷹、吉祥寺の駅前の都市構想については、委員長のお話だと、六長調では無理かもしれないとのことだった。事務局の方は大変だと思うが、七長申し送り事項として、六長調が終わるまでに整理してまとめられないか。

市民自治について、討議要綱では、ワクワクする感じが全然見せていないというお話があった。市民の関心を高める手段としてのホームページについてだが、他市区町村のホームページを見たが、武蔵野市のホームページは改善の余地がある。例えば避難先が五中だとすると、五中の住所さえ掲載されていない。災害に遭った際は、この道を通っていけば避難所まで安全だということがホームページから簡単に引き出せる必要を感じる。

また、ホームページには市民自治や子どものページがあるといいと思う。子どもの相談ページのようなものがあれば、ひきこもりの人もうまく相談につながれるのではないかな。相談にアクセスできないという意見もあったので、工夫ができるような方向性を打ち出せるといい。

開かれた学校づくり協議会をうまく利用して、学校の施設を市民に有効に使っていただいているかどうか。コミュニティづくりにうまく使えるはずだ。図書館が足りないという意見も出ていたので、学校図書館も住民に開放できるようなシステムができたらいいい。

【G委員】 私からは、市長との意見交換のときに意見として出された4点、①学校給食の無償化、②学習者用のコンピュータ（タブレット）の活用、③学校改築、④市政アンケートを論点として挙げたい。市民意識調査は、施策評価とも絡めて討議要綱の書き方でいいと思うが、市長の意見も踏まえ、今後の論点としたほうがいいのではないかな。

【H委員】 意見集約表のうち、職員の意見を中心に見た。現場で感じている課題、特に組織、勤務体制、人材育成などについて触れた事項が多い。ただ、反駁というより同調する感じで、より積極的に取り組んでいくべきではないかといったニュアンスの意見が多かった。特に人材の確保と育成については、各分野における多様化と専門性に対して、職員のスキルの底上げと、そのための実効性のある取組みをどう構築していくかではないかな。

地域との連携と協働については、職員が地域に出向くという記述に対して、賛同する意見はあっても、反対はなかった。現場で抱える課題の中で、地域とのつながりは改めて見ていく必要がある。

自治基本条例によって、市民参加のあり方が、より明確化、具体化されたが、それによって市政や未来がどう変わるかという具体的な市民自治のイメージはまだ共有されていないという意見もあった。今後は、市民自治がどうあるべきかを具体的にイメージできる方法で進める必要がある。

【C委員】 以前、日経新聞で自治体GISについての特集をしていた。水道、電気、ガス、道路、福祉、教育、様々なジャンルで使う地図を全部統合して、一括で処理するシステムの導入が先進的な自治体ほど進んでいる。武蔵野市では自治体GISにどう取り組んでいるのか。

【H委員】 武蔵野市は、庁内の統合情報システムでGISに取り組んでいる。ただ、基盤図に時代的な時間差がある。例えば、水道で使っていた基盤図と、ほかで使っていたところが違うので、調整が必要である。いろいろな要素のGISを見ることはできるが、職員が職務上の確認をする場合にのみ対応しており、外部には公開していない。

【委員長】 私からは主に3点挙げたい。

1点目は、市民自治や市民参加を今後我々がどのように考え、また、必要に応じてどう捉え直し、今後の武蔵野市の市民の方々と共有しながら進めていくかだ。意見交換でも、市民自治を担うのは意識が高い人たちだけだろうとぼっさり切る意見もあれば、今こういうふうにしていることこそ意義があるという意見もあった。市民自治は、時に迂遠になる。コストもかかる。市としてなぜこの時代においても市民自治を重視していくのか、捉え直す必要がある。

2点目は、地域の持続性に関してである。担い手不足や負担感はある。また、コミュニティ構想等の見直しも必要である。人口は減らないにしても、高齢化が進んでおり、社会構成等は変わる。市内における人口構成、働き方の変化を踏まえつつ、しかし、先ほどの市民自治にも関わって地域の中での支え合い、お互いを知ることの重要性を損なわずに、地域の活力をどのように生かすか。それを市政としてどう底支えするか。これは横串の議論につながる。居場所一つとっても、困った子どもが行けばいい場所ということだけではないはずだ。居場所の議論をすることを通して市民参加につながるし、居場所

づくりを通して、「困った」ことの意味自体をみんなで学び直す。地域の持続性を考慮した新しい仕組み、あるいはそれを考えるための基盤を市としてどのように提供するか考える必要がある。

3点目は、多様性についてである。六長のときは、外国人、セクシャルマイノリティ、障害、高齢、子どもについて、いろいろな形で議論した。しかし今回はまだ深く議論できていない。特に外国人に関する議論が減ったと感じている。コロナによって一時的にとはいえ外国人の顔が見えなくなった部分が大きいのと思う。ただ、現在は物すごい勢いで、もとの戻りつつある。外国籍の様々な方が介護を初めとした労働人材や留学生という形で増える。多様な属性を持つ方々との共生をどのように考えるか、多様性をしっかりと包摂して議論する必要がある。

長計の策定のプロセスそのものに対する疑問もいくつか出ている。我々としては、なぜこのような形なのかを市民に適切に説明しなければならない。子どもにも参加してもらえようにするには、子どもが理解できるように、何で我々はこういうことをしているのか、我々の言葉で改めて語る必要がある。

【I 委員】 事務局には、自己評価をしていただきたい。職員のアンケート回答数 74 名というのは望むべき水準なのか。改善すべき余地はあるのか。私どもは、意見交換になるべく多くの人に参加していただきたいという情報発信に必死に取り組んできたが、職員の 1 割にも満たない人しか回答してこなかったというこの数字は、私は大きな課題だと思っている。今回の策定委員会の討議要綱は、各課のワーキングが積み重ねたものであるもので、職員の意見がワーキングを通して反映されたものであるからこれでいいという評価のあらわれであるというポジティブな見方もできるが、市役所の職員は 1 割しか討議要綱に対して関心がないというのであれば、市民の意見を求める前に、市役所職員の意識改革をすることが最優先課題になる。

【委員長】 六長でも、I 委員は全く同じことを述べておられた。市の職員はゼネラリストであるので、担当分野に限らず様々な形で意見を出していただきたい。

【副委員長】 今の 10 倍の意見が入っていたら、市の職員（行政側）が誘導しているようにも見えてしまうからと、遠慮したのではないのか。

【I 委員】 記名式にしてみると意見を出しづらいと書かれたものがあつた。私が所属していた会社にもたまにアンケートがあつて、みんなこの時とばかりに書きまくる。組織

の特色、文化ということもあるが、記名式にしたら意見が言いづらいというのは致命的だ。組織の中で自分たちがキャリアを実現させ、仕事がよりよくなるようにコミットメントする。その気持ちが武蔵野市をよくする。その気持ちがない方たちがたくさんいるのに、市民に「考えましょう」と言う、あるいは有識者やボランティアに集まっていたくのは、ちょっと違うのではないかな。

【委員長】 武蔵野市方式の市民参加、市議会参加、職員参加のうち、職員参加はかなり特徴的だと思っている。職員は、市政の現場にいる方々だ。その方々の意見がない中で我々がどういうすばらしいものをつくっても、魂は入らない。ぜひ様々な意見を遠慮なく寄せていただきたいし、様々な仕組みを考え、努力していただきたい。しかし、これだけ言っても意見がなければ、職員のモチベーションはそういうものだ和我々は判断する。

【B委員】 コミットメントが意見を言うことを難しくしているのではないかな。職員は、対外的には勝手にしゃべるなという教育を徹底して受けてきた。意見を言うと、「お前、責任をとれるのか」という話になる。しかも、記名式だ。行政職には何か逃げ道をつくってあげるなど、意見聴取に工夫がいののではないかな。

【F委員】 これは記名式で行われたのか。

【企画調整課長】 責任を持った意見をいただきたいということで、パブコメでは市民には名前と住所等を書いたうえで、意見交換会では発言する際に「境の〇〇です」と言っている。職員についてもそれは同様だ。

【F委員】 市民に関しては納得できる。住民投票条例案のときも、全国からいろいろなご意見があり、それが市民の意見なのか、そうではないのかがよくわからない中で意見を受けとめるのは難しいと思っていた。ただ、職員に対するアンケートは記名にする必要はないのではないかな。部署も全部伏せて、職員として今考えていることが何かあるかと聞いたほうが、意見は出るのではないかな。

【委員長】 計画案についても同じようにご意見等をいただくが、そのときにも武蔵野市方式がより実効性を持つ形で行う。特に職員の方々は非常に重要な存在だ。我々は、職員の方にいかにスキルを持ってもらい、楽しく市政のために働いていただくかということも議論している。

【I委員】 武蔵野市の職員は、全国の自治体の中でもレベルは非常に高い。これは武蔵野市方式の結果でもあるだろう。武蔵野市は各計画策定でも外部のコンサルに丸投げするようなことはしない。手作業で効率は悪いが、これが行政マンのスペシャリティを上げて

いる。今この段階での職員の意見は、私たちにはものすごく貴重だ。私たち策定委員は、市民として各分野の専門性から意見を言えるが、行政のプロではない。実行性があるとかないとか、法律上アウトだとか、東京都の関係でできるとかできないとかいう行政のプロからの、感想ではない、責任ある意見を出してほしいので、記名式でいいと思う。

武蔵野市の職員は、基礎自治体のプロ中のプロだ。その誇りを忘れてはいけない。このことだけは強調したい。

【委員長】 重要な議論だ。今後の策定委員会等で議論を積み重ねていきたい。

(3) その他

①市内視察について

企画調整課長が、5月20日（土）の市内視察（第6回作業部会）について、資料4に基づいて説明した。

【委員長】 視察に関する要望あるいは説明してほしいこと等は、資料の準備や説明の都合上、事前に事務局にお寄せ願いたい。

【G委員】 改築中あるいは今後改築予定の小中学校について、車窓からでもいいのでどこか寄れるところがあれば見ていただきたい。事務局でルートの設定をしてほしい。

【C委員】 境公園について、ネットに公開されている論文等資料を集めている。それらを簡単なペーパーにまとめて委員に配付する。

以上をもって委員長が第12回武蔵野市第六期長期計画・調整計画策定委員会を閉じた。

以 上